The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語における空白 : フーコーの方法論
Author(s)	松川, 絵里
Citation	メタフュシカ. 2009, 40, p. 105-116
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5556
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

言語における空白
──フーコーの方法論──

松川絵里

はじめに

ミシェル・フーコーは、『レーモン・ルーセル』（1963）において、ルーセルが明るみに出した言語における空白の存在に注目している。それは、言語を可能にする原理であると同時に言語によっては取れきれない言語の限界でもある。また、言説分析の方法について論じられる『知の考古学』（1969）では、再び言語を可能にする空白とそれを明らかにするための方法について論じられている。このような共通点をもつにも関わらず、文学論と歴史分析の方法論というちがいからか、これらの比較はこれまであまり行われてこなかったように思われる。

そこで本論では、フーコーがこの「言語における空白」について語っているこの二つの著書を取り上げ、私たちの知の条件と限界を暴こうと試みるフーコーの言説分析の方法と、その可能性および限界を明らかにする。

『レーモン・ルーセル』は、『狂気の歴史』と関連づけて理性と非理性の関係、あるいは文学と狂気の親和性を論じたものとして、あるいはフーコーの他の文学論とともに「外の思考」の可能性を追求したものとして取り上げられることが多かった。これに対して、歴史分析の方法について述べられた『知の考古学』と比較することは、特に言説分析という方法にどのような影響を与えたかという点から『レーモン・ルーセル』という著作がフーコーの思想においてもつ意義を示唆することになる。

また、フーコーはいくつかの文学論を残しているが、1960 年代後半には文学への興味を急速に失ってゆく。それと同時に、フーコーの著作から「ラング／パロール」といった語が消え、「言説／言表」という語が積極的に用いられるようになる。特に「言説」という語が集中的に現われる 1969 年から 1972 年は、フーコーが自らの歴史分析の方法について理論化を試みた時期にあたる。『レーモン・ルーセル』と『知の考古学』における「空白」のちがいは、フーコーの方法論において「言説」という概念の導入がもつ意義を明らかにするだろう。

1.『レーモン・ルーセル』における空白：語の欠如

フランスの小説家・詩人であるレーモン・ルーセルは、独特の手法を用いて作品を書いた。その手法とは、ほとんど同音だが意味の異なる二つの文章をつくり、そのうち一方で始まりもう一方で終わる話をつくるというものである。たとえば、『黒人たちのあいだで』というコントは、《Les lettres du blanc sur les bandes du vieux billard...》（古びた撞球台（玉撞台／ビリヤード台）のクッションに記された白墨の文字は……）で始まり、《Les lettres du blanc sur les banes du vieux pillard.》（年老いた略奪者の部族に関する白人の手紙。）という一文で締めくくられる。

このようなルーセルの手法を、フーコーは言語を可能にしている空白の存在を明るみに出すものとして評価し、ルーセルの作品のなかにあらわれる反復の手法に注目している。

ここで「空白」という言葉によってフーコーが指しているのは、「語は、それらが指す事物よりも数が少なく、このエコノミーのかげで何ごとかを意味できるという語の欠如」（RR: 207＝230）のことである。

> もし言語が存在物と同じくらい豊かであったとしたら、それは事物の無駄で無言な分身であるだろう。つまり、存在なんかしないだろう。だが、それでも事物はそれを名指す名がなければ、夜の中にとどまっていることだろう。（RR: 207-208＝230）

フーコーは、「ひとに事物が見える、それはつまり語が不足しているからだ」（RR: 209＝232）と言う。指示すべき事物よりも指示する語のほうが少ないからこそ、私たちは異なる事物を同じ名で呼び、そこに意味の同一性を見出すことができる。このことから、語の欠如は「光明をもたらす欠落」（RR: 208＝230）とも呼ばれている。

しかし、この事実は普段は見えないものである。それは、言語の純粋な非存在であり、通常は言語によっては触れることのできない「言語の限界」である。そこで、この言語学的事実を明るみに出すためには、「特異な（「逸脱した」すなわち人を戸惑わせるような）」（RR: 208＝230-231）形式が必要となる。私たちは通常、一つの語や文が複数の意味をもちうることを忘れることによって、語が指し示すものを確定し安定して意味を読み取ることができる。だが、この空白のはたらきが感じられるのは、同じ一つの語が二つの異なったことを言うことができ、そして同じ一つの文の反復が別の意味をもちうるような状況においてだろう。ルーセルの手法は、そのような状況を生み出すためのものである。

フーコーはルーセルの代表作のタイトル『代役（*La doublure*）』を文字って、ルーセルの反復の作用を次のように説明する。

> 彼〔ルーセル〕は現実的なるものをもう一つの世界を裏打ちすること（doubler）ではなしに、言語の自発的二重化（redoubler）の数々において、思い設けなかった一つの空間を露呈（*découvrir*）、それをいまだかつて言われたことのないことどもによって蔽う（*recouvrir*）ことを目指すのである。（RR: 25＝21：強調＝原文）

語は、そもそもそれが指示する事物の doubler（代役）を演じるものである。語が事物の代役であることを忘れることによって、私たちのまなざしは語そのものの存在（existence）にとどまることなく、それが指し示す意味＝方向（sens）を読み取ることができる。しかし、ルーセルの反復は、事物を裏打ち（doubler）するのではなく、事物の代役（double）であるところの語を反復することによって、言語を二重化（redoubler）してしまう。たとえば、『黒人のあいだで』における二つの文章は、そこに織り込まれた微細な差異（billard の b と pillard の p）によって二つの異なった意味をもつ。このようにルーセルは、同一性のなかに微細な差異を織り込むことによって、言語を可能にしている空白の存在を露呈させる。

とはいえ、言語の不在を言語によって捉えようとするその試みは、ある種の不条理さをともなわざるをえない。フーコーは、西欧で伝統的に理性を表わす語として用いられてきた「光（lumière）」と区別して、ルーセルの反復を「閃光（éclat）」、「稲妻（éclair）」といった言葉で表現している。ルーセルの反復は見たことも聞いたこともないような情景を描き出すが、こうした物語は言語を可能にする空白を埋めるためだけに展開される。それは、言うべき何ものか、メッセージのようなものをもっておらず、その意味では「営みの不在」といわざるをえない。フーコーは、ルーセルの作品を文学作品として評価しつつ、理性の営みであるロゴスとは異なる「非理性」的なものとして捉えている。

２．『知の考古学』における空白：言表の稀少性

フーコーは、自らの分析方法について説明している唯一の著書『知の考古学』で、再び言語における空白を取り上げている。ただし、『知の考古学』で言及される「空白」は、『レーモン・ルーセル』における「語の欠如」とは異なる。このことを確認するために、この節ではフーコーが分析方法について説明するために用いた「言説」という概念の特徴を確認する。

まず、言説の第一の契機は、「言説（discours）は、記号の継起の総体によって、ただしそれらの継起が言表（énoncé）であるかぎりにおいて……構成される」（AS: 141＝163）というものである。フーコーによれば、「ひとつの言表は常に、ラングにも意味にも完全には汲み尽くされえない一つの出来事である」（AS: 40＝46）。

ラングの分析は「無数の言語行為を可能にする有限の規則の総体」を明らかにしようとする。つまり、ラングの分析においては「いかなる規則によってこのような言表行為（énonciaiton）は構成されたのか？」、「いかなる規則によって他の似たような言表行為は構成されるのか？」が問われる。しかし、実際には言語学的諸要素の無際限の組み合わせに比べれば、相対的にわずかなことが言われているにすぎない。

> 一つの自然言語中に言表されえたかもしれないものに比べ、また言語学的諸要素の無際限の組み合わせに比べれば、言表は（その数がいくら多数でも）常に数において劣っている。与えられた一つの時代に使われる文法や豊かな語彙からすれば、結局のところ、そこには相対的にわずかなことが言われているにすぎない。（AS: 156＝182）

そこで、言説分析では、「なぜ他のではなくこの言表が存在するのか？」を明らかにしようと努める。言説分析が基づく、この「〈すべて〉が言われているわけではないという原理」が「言表の稀少性」と呼ばれる。

また、フーコーによれば、「解釈というものはすべて、その存在自体が言表の実際の稀少性によってのみ可能なもの」だが、その事実を無視して逆に意味の豊かさを強調する「言表の乏しさに対してなされる反作用の仕方」である。「一体述べられたことのなかで何が言われているのか？」と問う解釈は、隠された意味を求めてある言表を別の言表に置き換えてしまう。このような置き換えを避けるため、言説分析では言葉のもつ意味に対して無関心が貫かれる。

言表を稀少性として捉えること、それは一般的な構造を求めてある言表をその一例としたり、意味を求めてある言表を他の言表に置き換えたりせず、各々の言表をその独自性において捉えることである。『知の考古学』においては、「固有の（propre）」、「独自の（singlier）」、「特殊な（spécifique）」、「個別的な（particulier）」といった形容詞が常に重要性をもつ。

言説のもう一つの契機は、「言表が同一の編成に属するかぎりにおいて、言表の総体を言説と呼ぶことができる」（AS: 153＝179）というものである。言説はただ言表が集まるだけで言説となるわけではない。言表の集合がある統一性をもった一つの言説として成り立つためには、諸言表がある規則にしたがって編成されていなければならない。言説分析の課題は、この「編成の規則（règle du formation）」と呼びうるものを明らかにすることである。

ここで重要なのは、この編成の規則が言説ごとに異なるということだろう。フーコーによれば言説の統一性は、①唯一の同じ対象、②一定の叙述スタイル、③概念の一貫性、④テーマの同一性などによっては説明できない。一つの言説中には、様々な対象、叙述スタイル、概念、テーマが共存しており、それらのあらわれ方は言説ごとに異なる。つまり、それぞれの言説が特徴づけられるのは、それらの諸要素の分散の仕方によってである。そこで、言説分析では言表の様々な連関を記述することによって、それらの分布の規則性を浮びあがらせることが目指される。

また、言説編成は「空隙、空白、不在、限界、切断などの一つの分布（répartition）」（AS: 157＝183）でもある。それらの諸要素の共存、継起、変容、消滅を捉えるためには、「何が言われたか」だけでなく、「何が言われなかったか」をも明らかにしなければならない。実際、たとえば『言葉と物』では「18 世紀末まで生命というものは実在しない」（MC: 173＝183）、「18 世紀以前に〈人間〉というものは実在しなかった」（MC: 319＝328）といった記述によって、それぞれの時代における言説の特殊性が端的に示されている。

以上のように、「言説」という概念がもつ二つの契機、言表の稀少性と編成の規則は、ともに諸言説がそれぞれ特有の空白によって成り立っていることを示している。

ルーセルの作品が明るみにだした空白、語の欠如は、あらゆる言語行為を可能にする原理であった。それに対して、フーコーの言説分析が明らかにしようとするのは、ある時代、ある社会に固有の言説を可能にしている空白の存在である。言語が語るのは一個の欠如から出発してのみであるという事実を、フーコーは「言説」という概念の導入によって、言語そのものの歴史性を浮びあがらせるものとして練り直す。たしかに、言語が何かを語るのは一個の空白から出発しての

みである。だが、実際にはただ一つの言語が存在するのではない。時代や社会によって様々な言説が存在し、空白のあり方も言説ごとに変容する。フーコーの言説分析はその空白のかたちを記述することによって、それぞれの時代において言説を可能にしている歴史的な条件を明らかにしようとするのである。

３．言表のパラドックス

フーコーは、一般的な構造を求めてある言表をその一例としたり、意味を求めてある言表を他の言表に置き換えたりせず、各々の言表をその独自性において捉える言説分析を「言説的出来事の純粋な記述」（AS: 38-39＝44）と捉え、それが「実現された言語運用のみに関わる」ことから「歴史的分析」であると主張している（AS: 143＝166）。また、歴史家のポール・ヴェーヌは、このようなフーコーの態度に対して、「人々の実践をあるがままに見つめようと努め」、史料のほかに「どんな仮定も立てていない」点で「完璧な実証主義者になった最初の歴史家」と評価している[1]。しかし、言表の性質をさらに詳しくみると、フーコーの言説分析を「言説的出来事の純粋な記述」（AS: 38-39＝44）や「どんな仮定も立てていない」とみなすにはいくつかの困難がつきまとうことがわかる。

言表の不可視性

「言表はたとえ隠されていないとしても、だからといって可視的なわけではない」（AS: 145＝168-169）。言表が「隠されていない」というのは、「言表は言語運用の実現された存在様態」であり、「潜在的な言表というものは認められない」からである。また、言表が「可視的なわけではない」理由は、存在（existence）の不可視性によって説明できるだろう。フーコーは、言表が、文や命題、意味、対象、あるいはその他のあらゆる言語分析が可能になるための条件となっているために、言表自体はこれらの研究によっては対象化されえないと言う。そこで、「言表を認め、それ自身として考察するためには、まなざしと態度を転換させることが必要である」（AS: 145=169）。だが、このような「転換」を経てもなお、言説分析は言表を「現にあるがままに見ている」と言えるのだろうか。言表の存在（existence）を捉えるために重要なのは、「単に意味されるもの（シニフィエ）の観点を一時保留すること（人々は今、そうする習慣になっている）ではなく、意味するもの（シニフィエ）の観点をも一時保留することである」（AS: 149＝170）[2]。このような「転換」は、言語の言語たるゆえんである記号としての機能を捨象するだけでなく、歴史における「非連続的なものの転位」という重要な帰結をもたらす。

---

1 Veyne, 1978.

2 このような表現は、明らかに現象学的還元が意識したものである。バーナウアーは、このような「転換」に現象学的還元と逆の役割をみており、「現象学的還元は、意識に対する与件としての存在の問題を宙吊りにするが、考古学的な態度の転換は、存在の次元に直面し、記号の系列を単に可能なものではなく、実際に機能しているものとして認識するために実行される」（Bernauer, 1990: 104＝195）と捉えている。一方、ドレイファスとラビノウは、この転換を、「二重の還元」（Dreyhus and Rabinow, 1983: 49＝84）として捉えており、「フッサールをさらにもう一歩推し進めて、フーコーは指示対象と意味とをともに単に現象としんて取り扱っている」（Dreyhus and Rabinow, 1983: 50＝85）と述べる。

言表の非連続性

フーコーによれば、「歴史はその伝統的な形態においては、過去の〈モニュメント〉を「記憶化すること」、それらを〈ドキュメント〉に変えること」を企てたが、「今日では歴史とは、〈ドキュメント〉を〈モニュメント〉に変換するものである」(AS: 14-15＝15)。前者は、史料を過去の記憶や痕跡として解読し、それらがほのめかす過去、今でははるか彼方に消え去ってしまった過去を再構成することを目指す。そして、そのような歴史にとって非連続的なものとは、「出来事の連続性があらわれるために、分析によって曲げられ、減少し、消し去られるべきものであった」(AS: 16＝17)。一方、史料を〈モニュメント〉に変換する歴史において、「非連続的なものはもはや歴史的読解の否定的契機ではなく、対象を確定し、分析を有効なものにする積極的な要素となる」(AS: 17＝19)。

問題は、この非連続的なものが歴史家による操作概念であるということだ。

> 非連続性とは逆説的な概念である。それは探求の道具であると同時に目的であるからであり、また自己の原因をなす領野の限定をなすものだからである。また、諸領域の個別化を可能にするが、それら相互の比較によってはじめて非連続性は打ち立てられるからである。さらにそれはとどのつまり、おそらく単に歴史家の言説のうちに現存する概念ではなく、ひそかに彼が前提としている概念だからである。事実、歴史家は、対象としての歴史が――そして彼自身の歴史が――差し出されるこの切断から出発せずに、どこから語り始めることができようか？（AS: 17＝18）

フーコーが主張する歴史の非連続性に関して、よく議論の俎上に上がるのは「エピステーメー」という概念だろう。だが、フーコーによれば、「非連続性とは単に歴史の地質学において断層を形づくる大きな諸偶然事の一つではなく、すでに言表という単純な事実中にあるものである」(AS: 40＝46)。たしかに、そもそも一つの言説を連続した統一体として扱うのではなく、言表という単位に分解し言説をそれらの総体として扱う態度からして、非連続性を重視するやり方だといえる。言説分析において、分析の出発点は常に言表のレヴェルにあり、言表の差異と分散をもとに言説間の差異やエピステーメーの断絶などが明らかにされる。だが、非連続性という性質を考慮すると、分析の基礎をなす言表という単位が、まさに分析の過程で記述の結果として生み出されたものということになってしまう。

言表の反復可能な物質性

言表のもうひとつのパラドックスは、「言表は、その物質性にも関わらず繰り返されうる」(AS: 134＝155）というものである。この反復可能な物質性という特徴によって、言表（énoncé）は一回的行為である言表行為（énonciation）とは区別される。では、複数の言表行為が同一の言表の反復とみなされるのは、どのような場合だろうか？

フーコーによれば、「言表の物質性は、占められた空間は明確な表現の日付によっては、およ

そ規定されず、むしろ、事物あるいは対象の社会的地位（statut）によって規定される」（AS: 135＝156）。たとえば、「『悪の華』のすべての版において（異本や発売禁止のテクストの類はさておくとして）見いだされるのは同一の言表の働き」であるが、「文学史家たちにとって、著者の監督のもとに刊行されたある書物の版は、死後の諸版と同一の規約を有しない」（AS: 135＝156-157）。また、「地球は丸い、あるいは種は進化するといった言明は、コペルニクスの前と後、ダーウィンの前と後では同一の言表を構成しない」（AS: 135＝157）。これらにおいて変容したのは、語の意味ではなく、これらの言表がもつ他の要素との関係である。つまり、二つ以上の言表行為が他の言表との関係のなかで同じ位置を占めれば、それらの言表行為は同一の言表とみなされる。また、同じ語や文の反復であっても、異なる編成（連関）に属する言表行為は同一の言表とはみなされない。言表可能な物質性とは、言表の同一性が他の要素との関係によって決定されるという言表の示差的性質を示している。

このことからも、やはり言表は言説分析の過程で生成されるということがわかる。言説分析という言説のなかで引用された言表は、たとえそれがどんなに忠実な引用であっても、引用元の言表と同一の言表とみなすことはできない。というのも、それらの言表はそれぞれ異なる編成に属するからである。

言表のほかに何物も想定しないという意味では、たしかに、言説分析は「実現された言語運用のみに関わる」と言えるかもしれない。しかし、「言説的出来事の純粋な記述」と認めるには無理があるように思われる。言表の不可視性、非連続性、反復可能な物質性といった言表の逆説的な性質を考慮すると、分析の基礎をなす言表という単位自体が、分析の過程で記述の結果生み出されたものということになるからである[3]。それでももしこのような記述が歴史であると主張しうるとしたら、それはどのような意味においてだろうか？　そして、言説分析によって明らかにされる空白は、いったい誰のどのような限界を示しているのだろうか？

４．アルシーヴの記述と診断

フーコーは、諸言表の連関と変換によって構成されるシステムの総体を「アルシーヴ」と呼び、「いかにしてこのアルシーヴの記述は自己を正当化できるのか？」（AS: 172＝201）と問うている。一つの社会、一つの文化、一つの文明のアルシーヴを完全に記述し尽くすことが不可能なのは明らかである。それゆえ、過去の言表の連関をありのままに再現することはできない。また、私たちは私たち自身のアルシーヴを記述することもできない[4]。「アルシーヴは、その全体性においては記述されえない。そしてそれはその現在性（actualité）においても輪郭を捉ええない」（AS: 171＝201）。しかし、アルシーヴの分析は一つの特権的な区域を含むことによって、その方法は

[3] ドレイファスとラビノウは、編成の規則について、「それらの諸規則にはおそらく記述的な価値しかないはずだろうに、フーコーはそれらにそれら固有の原因としての有効性を記述させ」（Dreyhus and Rabinow, 1983: 127）、「不当にもこれら諸編成の存在条件として実体化した」（Dreyhus and Rabinow, 1983: 83＝130）と批判している。

[4] ドレイファスとラビノウは、「自分自身のアルシーヴを記述することは不可能であるという主張は、……地平という概念の使用とともに解釈学的な循環においてはお馴染みのものである」（Dreyhus and Rabinow, 1983: 86＝134）と指摘している。

間接的なものであるにせよ、「私たちの診断」としての価値をもつとフーコーは考えている（AS: 172＝202）。

> それゆえ、アルシーヴの分析は一つの特権的な区域を含んでいる。すなわち、私たちに近いと同時に私たちの現在性（actualité）と異なりつつ、私たちの現在（présent）を取り囲み、その上に突き出し、他者性のうちにそれを指し示す時間の縁である。アルシーヴの記述は、まさしく私たちのものたることをやめるようになる言説から出発して、その可能性（および可能性の支配）を展開する……アルシーヴは私たちの外部とともに始まる。（AS: 172-201）

一見このような説明は、次のようなことを意味しているようにみえる。つまり、私たちは私たち自身の言説の存在条件である空白を記述することはできないが、すでに過ぎ去った過去の言説についてはその空白を明らかにすることができる。私たちは、私たちとは異なる過去との差異を示すことによって、間接的に私たちの時代の特殊性を浮びあがらせることができる、と。しかし、前節で確認したように、私たちは過去の言表を正確に再現することはできない。また、単に私たちとは異なる別の時代との差異を示すだけでは、私たち自身の言説を可能にしている空白を示したことにはならないだろう。言説分析が「私たちの診断」として機能するためには、さらに別の条件が必要なように思われる。

ここで、私が指摘したいのが、言説分析の特徴が常にそれとは異なるもう一つの歴史と対比しながら述べられているということだ。それは、〈モニュメント〉を〈ドキュメント〉に変える歴史に対して、「〈ドキュメント〉を〈モニュメント〉に変換する」歴史であり（AS: 15＝15）、前者が痕跡や記憶から「過去を再構成」しようとするのに対して、「その物質性を作品化する」（AS: 14＝14-15）。それは、「あらゆる現象を唯一の中心――原理、意味作用、精神、世界観、総体的形態といったもの――のまわりにまとめあげていく」歴史に対し、「分散の空間を展開する」（AS: 19＝20）。また、それは「言われたことのうちに隠された〈別の〉――にもかかわらずそれは〈同一〉のままにとどまる――言説を探し求める代わりに、絶えず様々な差異化を行う」（AS: 268＝310）。

連続性的な歴史との対比は、分析方法を説明する『知の考古学』だけでなく、実際の分析の過程でもしばしばみられる。たとえば、『言葉と物』には次のような記述がある。

> たとえルネッサンス以来今日まで、ヨーロッパの〈理性（*ratio*）〉の動きにほとんど断絶がないという印象を与えられようとも、それは偽りのものである。リンネの分類は多少整備すればおおむね有効性のようなものを持ち続けるだろうとか、コンディヤックにおける価値論は部分的には19世紀の限界効用学派のうちに認められるとか、ケインズは彼自身の分析とカンティヨンのそれとのあいだに類縁関係を感じていたとか、〈一般文法〉の意図は……今日の言語学からそれほど隔たってはいないとか、そのように考えても無駄である。――観念やテーマのレヴェルでのこうした擬−連続性は、おそらくすべて表層的現象にすぎない。考古学のレヴェルに立ってみれば、18世紀と19世紀の曲がり角で、実定的諸領域の体系は全

体として大きく変わっているからだ。（MC: 13-14＝21）

実際、このような連続性的な歴史との対比は、言説分析の記述のなかで重要な役割を果たしているように思われる。言説分析は連続性の歴史と異なる歴史であるだけでなく、連続性の歴史との関係において初めてその効果を発揮しうるものなのではないだろうか。

たとえば、『臨床医学の誕生』（1963）の冒頭では、18 世紀半ばのヒステリー患者の治療についての次のような記述が引用されている。「まる 10 ヶ月間、毎日 10 時間から 12 時間の入浴」によって、「水浸しにした羊皮紙の断片のような、粘膜の切れ端が……軽い痛みをともなって隔離し、毎日尿とともに排出された」（NC: Ⅲ＝1）。おそらく、私たちはこの文章を引用元である「両性の神経症疾患概論」で読むとき、この治療と判断は未だ十分な科学性を有していない、と思うだろう。そのとき、私たちの判断にはすでに現在の医学との連続性においてその価値を読み取ろうとする解釈的な態度が含まれてしまっている。言表の記述によってそれらの言表を異なる連関に置きなおすことは、私たちをこのような連続的な思考から引き離す効果をもつ。

前節で引用元の史料のなかの言表と、引用された言表とは同一の語や文であっても同一の言表ではないと述べた。それらは新たな編成のもとに置かれ、別の言表を構成することになる。フーコーがルーセルについて語った言葉遣いを真似るなら、言表の記述は語を意味のレヴェルではなく言表のレヴェルで二重化（redoublement）する作用をもつ。問題は、その二重化を引き起す差異が、一体何と何の差異かということである。単純に考えれば、それは引用元の言説が形成された時代と、それが引用される現代の差異と考えられる。だが、私たちはその言説に引用元の史料で直接触れたとしても、それが書かれた時代と同じようには読めない。だとしたら、言説分析の二重化を引き起す差異とは、すでに過ぎ去ってしまった過去と現在との差異ではなく、私たちが史料を〈ドキュメント〉として読むときと〈モニュメント〉として関わるときの差異ということになる。言説分析による二重化の過程で、私たちは意味の地平から言表の次元へと押し出される。言説分析とは、ある地層を描きながら別の地層へと、意味の地平から言表の次元へと押し出される地すべりのような体験なのである。

また、たとえば『言葉と物』における「18 世紀末まで生命というものは実在しない」（MC: 173＝183）という記述は、18 世紀の博物学の空白を示すようでいながら、同時に 18 世紀の博物学に 19 世紀の生物学との連続性を見出そうとする私たち自身の思考の空白（限界）を示唆している。このように言説分析で明らかにされる空白は、一見、過去の言説の空白を示しているようでいながら、間接的な仕方ではあるが、連続的な思考にとらわれた私たち自身の言説の空白を露呈させるものである。そして、私たちの限界を示すそのかぎりにおいて、言説分析は「私たちの診断」としての価値をもつだろう。

このように、言表の記述は、過去に実在した連関を再現するというよりも、むしろ現在の私たちの思考の連続性を「断ち切る」という仕方でなされる。そしてこの連関の記述が描き出す〈他者〉とは、私たちの知とは異なる知という意味での他者ではなく、私たちの連続的な思考を可能にしていながらそれ自身によっては捉えられないものという意味での他者ではないだろうか。

連続的な歴史にしろ非連続的な歴史にしろ、歴史とは、すでに過ぎさってしまった過去の再現というよりも、過去との関わりを通じてかつて私たちがそうであったところの過去と現在の私たちとの関係を紡ぎなおす、そのような営みではないだろうか。

そして、言説分析とは、すでに過ぎ去った過去そのものの空白、私たちとは異なる時代という意味での他者の限界を描き出すというよりも、そのような他者との関わりを通じて間接的に私たち自身の限界を描き出すことによって、私たち自身の限界を更新し、私たち自身が〈他なるもの〉となるような体験である。

私たちが語るのは、言語の原理であると同時に限界であるような一個の空白から出発してのみである。だが、実際にはただ一つの言語が存在するのはなく、空白のあり方も言説ごとに変容する。それは、単に様々な言説、様々な空白、様々な限界が存在するというだけでなく、私たち自身が現在とは異なる言説を、異なる空白を、異なる限界をもちうること、私たち自身が現在とは〈他なるもの〉となりうるということを意味している。

（まつかわえり　臨床哲学・博士後期課程）

文献

フーコーのテクストからの引用・参照は以下の略号によって示す。

RR: *Raymond Roussel*, Gallimard, 1963. =『レーモン・ルーセル』豊崎幸一訳、法政大学出版局、1975 年。

NC: *Naissance de la clinique: Une archéologie du regard médical*, Presses Universitaires de France, 1963. =『臨床医学の誕生――医学的まなざしの考古学』神谷美恵子訳、みすず書房、1969 年。

HF: *Histoire de la folie à l'âge classique : Suivi de mon corps, ce papier, ce feu et la folie, l'absence d'œuvre*, Gallimard, 1972. =『狂気の歴史：古典主義時代における』田村俶訳、新潮社、1975 年。

MC: *Les mots et les choses: Une archéologie des sciences humaines*, Gallimard, 1966. =『言葉と物――尋問科学の考古学』渡辺一民・佐々木明訳、新潮社、1974 年。

AS: *L'archéologie du savoir*, Gallimard, 1969. =『知の考古学』中村雄二郎訳、河出書房新社、1995 年。

Roussel, Raymond, *La Doublure*, Jean-Jacqunes Pauvert, 1963.

Bernauer, James W., *Michel Foucault's force of flight: Towerd an ethics for thought*, Humanities Press, International, Inc. 1990. =『逃走の力――フーコーと思考のアクチュアリティ』中山元訳、彩流社、1994 年。

Dreyhus, Hubert L. and Rabinow, Paul, *Michel Foucault: Beyond structuralism and hermeneutics, Second Edition*, The University of Chicago, 1983. =『ミシェル・フーコー：構造主義と解釈学を超えて』山形頼洋、鷲田清一他訳、筑摩書房、1996 年。

Spigel, Gabrielle M., "History, Historicism, and the Social Logic of the Text in the Middle Ages" in

Speculum: A Journal of Medieval Studies, Vol.65, January 1990, No.1. =「歴史・歴史主義・忠誠テクストの社会論理」渡部ちあき・越智博美訳、『思想』No.838、1994 年 4 月、4-39 頁。

Veyne, Paul, «Foucault révolutionne l'histoire» in *Comment on écrit l'histoire*. Seuil, 1978, pp.383-429. =「歴史を変えるフーコー」、『差異と目録』大津真作訳、法政大学出版局、64-153 頁。

Le vide dans le langage : la méthodologie de Foucault

Eri MATSUKAWA

Michel Foucault considere que on parle et vois les choses parce que il y a le vide dans langage.

Raymond Roussel (1963) dits que les répétitions de Roussel révèle le vide dans le langage: la carence de mots qui sont moins nombreux que les choses qu'ils dèsignent. La langage ne parle qu'à partir de un manque. Pour mettre au jour ce fait linguistique, Roussel montre que le même mot peut dire deux choses différents et le même phrase répétée peut avoir un autre sens en redoublant les mots dans ses æuvres.

Depuis, Foucault a élaboré la notion de discours pour expliquer sa méthode de l'analyse, et ce apport la modification de l'idée du vide dans le langage. Dans *L'archeologie du savoir* (1969), le vide concerne la rareté de énoncés; par rapport à ce qui aurait pu être énoncé dans une langage naturelle, par rapport à la combinatoire illimitée des éléments linguistiques, les énoncés sont toujours en déficit. La formation discursive appraître comme disposition des énoncé.

Un part, les répétitions de Roussel montre le vide qui permet un nombre infini de performances, d'autre part l'analyse de formation discursive essaye déterminer les conditions des performances verbales réalisées. En ce sens elle vaut pour notre diagnostic..

「キーワード」
空白、語の欠如、反復、言説、言表の稀少性